



聖

吉 由 井 古



版 社 潮 新

発行■昭和五十一年五月十五日

三刷■昭和五十一年八月十日

著者■古井由吉（ふるいよしきち）

定価■八〇〇円

聖

（ひじり）



発行者■佐藤亮一 発行所■株式会社新潮社

郵便番号一六二／東京都新宿区矢来町七一／電話〇三一二
六六一業務五一一一・編集五四一一／振替東京四一八〇八

印刷所■株式会社金羊社

製本所■神田加藤製本

© Yoshikichi Furui, Printed in Japan 1976

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

聖

(ひじり)

装帧■司

修

そのお堂の前を私は一度は通り過ぎた。

背中の荷物の重みに足を急かされ、立ち止まるでもなく、暗い格子の奥へ目を投げるでもなかった。

竹筒の中で黒く腐れた花、ぼろぼろに崩れてまだ白い米の飯、これも供物なのか小石で押えられた黄色い野球帽などの、何とはない陰惨さが、むしろ目をそむけさせた。最終の夜行で帰るつもりなら、あまり道草を喰ってられない時刻でもあった。いったん晴れかけた空に、山から寄せる黒雲の動きが激しく、通り雨がまた来そうな気配があった。

しばらく行って私はしかし振り返った。雨風に晒らしぬかれた、間口奥行きともに一間ほどのお堂の脇に、一步下がって寄りそうように、同様に古ぼけてはいるが頑丈そうな掘立小屋が、板戸も板張りの窓も久しい表情で閉ざして、腰高の夏草の中に立っていた。そ

の裏手はすぐに川で、川向うには低い山が迫っていた。

あれなら、雨露を十分にしのげるな、と私は思ったものだった。そして一瞬、どこか浮浪者めいた目つきで、そこになにかうまい当てでもあるように、小屋を見つめた。身辺にいささか問題があるとはいえ、都会に帰れば家もあり親もある二十四歳の学生としては、唐突な思いつきだった。もう一日二日帰りたくないという気持はあった。旅館に泊まる金はない。しかし四日もつづけて山の無人小屋で寝た後で、わざわざ何の変哲もなさそうな麓の掘立小屋をこじあけて、もうひと晩過していく気はなかった。

道の反対側は遠く本流の土手まで田畑が続いて、実りかけた稲が夜来の風雨でところどころ押し倒されていた。道の百米ほど先になだらかな岡が盛り上がり、農家が一軒大きな藁葺屋根を黒々と差し上げ、その向うに村が隠れているようだった。高圧線のつらなりの先へ黒雲が流れ集ってやがて平らかにひろがり、地平から何本も突き出す工場の煙突のけむりと柔かな灰色に融けあって、街のそう遠くないことを感じさせた。そのまま私は道を歩きつづけ、岡のそばを通り過ぎた。村はやはり見えなかった。

私はその四日前にそこからすこし北にあたる麓の温泉から山に入り、まず表尾根をほぼまっすぐ北へまる一日歩き、それから西へ折れて裏尾根に入り、三日かかってちょうど半

円を描くようにして南へもどり、その朝、県境いの山を西から東へ越えてきた。このあたりの山はどれもそれほど高くはないが懐が深く、裏尾根ともなれば頂上近くまで原生林にびっしり覆われ、八月末のやや季節はずれの時期のせいもあって、二日目からまる三日というものは人っ子ひとりにも出会わなかった。前の晩に高湿原状の尾根の小屋でようやく泊まり合わせた中年の男は、これからひとりで裏尾根に入る予定だと言い、夜更けまでときおり梟のような鳴き声を運んで吹きつける雨の音の中で心細そうに、いい年をして単独行などをしたがる性分の度し難さをこぼしていたが、朝になっても雨の止みそうな様子もないのを見ると、「こいつはいけません。安楽に行きましょうや。ああ、極楽だ、極楽だ」ともう湯につかるようなしぐさをしながら、広い高湿原を西の温泉場へ下って行った。

私も安楽に行きたかったが、温泉で休む金も覚束ないので、男から不用になった非常食の袋をひとつ貰って雨の中を東へ登りにかかり、展望もきかないので足もとばかり見つめて一時間ばかりで頂上まで這い上り、そこでいきなり髪の毛がほんとうに宙に向かってザワザワと逆立ちはじめたのに度胆を抜かれ、雷鳴を背に、転げるように駆けてたちまち東の谷へ降りてしまった。そこまでは雷に追われたとはいえず順調だった。

沢ぞいの道を行くと、昨夜の雨のせいで至るところ山が崩れ、音もなく滑る濁流の中へ土砂を末広がり押し出していた。山から沢へ道を塞ぐ土砂のスロープの表面に、まだなまましい釣合いの緊張がこもっているように見えた。三箇所目の崩れのところで、低くねじくれた松の木が根ごと押し出されて異様に赤い枝を濁流のすぐ上へ静かに差しかけているのを目にした時には、私は子供みたいにしゃがみこんでしまった。四つ這いに木のところまでそろそろと寄って、傾いた幹の下をくぐったものか上を乗り越えたものか、私はしばし全身で思案した。結局、背中の荷物が邪魔になって下はくぐりきれないと見て、根もとのほうに足をかけ、体重をゆっくりのせると、根がずずと動き、そして止まった。目をつぶって、私は背後の濁流を思った。つかのま、流れとひとつになった。その瞬間、真白になった頭の中へ、漂流の切株みたいに、《五月雨を集めて早し》と有名な句がぼかり浮び、私はひとりで暗い声を立てて笑い出した。永遠が私の身体からだを借りて笑っているような、身の毛のよだつ滑稽さだった。

それきり恐怖心が麻痺して、私は四時間あまりのあいだ、何箇所も何箇所も崩れた土砂の上をほとんど無造作な足取りで渡った。何度目かに、渡りきったとたんに背後で鈍い音がして、ひと抱えほどの土砂が気紛れのように滑り出し、友を呼んで気楽にずり落ち、最

後まで私の足跡をふたつだけくつきりつけて水の中へ沈んだ。池に石を投げたのと変りのない波紋が円くひろがり、そのまま流された。私ははっともしなかった。

あれは危かったな、と考えはじめたのは、谷の出口のようなところにある登山者相手の店でラーメンを啜っている時だった。ちょうど表尾根のほうから何組かのパーティーが降りてきていて、N市まで出るバスが不通になったと騒いでいた。途中でバス道の橋が流されたので八キロほど下流の町まで歩かなくてはならないという。

せめて橋の落ちた地点までバスが来てくれればいいのに、と総勢十人ばかりが口々にバス会社の怠慢を罵りながら、寄合世帯の陽気さでぞろぞろと川の左岸を一時間も下つてくると、なるほど、右岸へ渡る長さ二十メートルほどの木の橋が桁をはずされて真中からきれいに落ちていた。左手から、河床は深い幅の狭い支流が直角に近い角度で向きを変えて流れこんでいたが、こちらにかかる粗末な釣橋のほうは無事なのが、おかしいようなものだった。

その橋を渡る時、私は流れの中に妙なものを見た気がした。ちょうど橋の下あたり、流れが浅瀬にかかって逆巻くところで、それは水の中から押し上げられ、私のほうにまともに顔を向け、一瞬、しゃれたうべ髑髏のように見えたのだが……。

落ちた橋を眺めながら砂防工事の話などをしていた連中が、いつのまにか、来年に迫ったオリンピックの為にあちこち掘り返されて日に日に様子の変わっていく東京の街の話を、冷やかなような見物人の口調ではじめていた。

橋を渡りきると私は急に左の足首に痛みを覚えて、そちらへ気をそらされた。道端に腰をおろし、山靴を脱いで調べると、やはり山崩れのところで無理な足の運びをしていたせいか、足首が腫れていた。その間にほかの者たちはてんでに畑の畔をたどり、本流の土手に上がるとおのずと一列になって歩き出した。先のことを考えると難儀だったがこうしていてもしかたがないので私もすぐに立ち上がり、畔道へ入ったものの、一歩ごとに柔くめりこむ土が足首をよじるように苦しめるので取りあえず外へ出て、畑をはさんで土手と平行につづく石ころ道をしばらくたどることにした。

片足を引きずる歩きにもやがて慣れた。道の左手には夏草が茂り、そのすぐ向うの低い山の根にそって川の流れる音がした。さっき釣橋で渡ったのと同じ流れだったが、私はいつものまにか川の上下を取り違え、本流と並んで街まで下る流れをたどっているつもりになっていた。歩くにつれて右手の田畑が広くなり、土手道が遠くなり、その上を一列に歩む人影が雨もよいの空の薄明るさの中にくっきり浮び、平野を斜めに横切る高圧線と同じ方

向へ小さくなつていくのを、氣にも止めずにいた。そしてお堂の前も通り過ぎた。

しばらくしてあたりがまた薄暗くなり、私は足もとに目を落して歩きながら、川の音がいよいよ急になつてこちらに落ちてくるふうに聞えるのを訝つていた。それから顔を上げて、左右から近づく低い山を見まわし、自分が平野に背を向けて枝谷のほうへ歩いていることに気がついた。強い雨が降り出した。

身を翻して私はいま来た道を駆けもどりはじめた。そしてたちまち、痛むほうの足を今度は完全にひねつてしまった。

奇妙な焦^{あせ}りが取り憑いた。痛みに顔を歪めながら、私は立ち止まることができなくて、ひどい跛を引いて雨の中を走りつづけた。どこまで走るのか、それさえもはっきり考ええなかった。

掘立小屋を目にした時、私はようやく自分の目的に思い當つた。しかし駆け寄つてみると、川上のほうに向いた板戸には大きな錠がかかつていた。道に向いた板の窓に手をかけてみたがびくともしない。さらにお堂との間を抜けて板戸と反対側へまわると、そこにも腰をかがめなくては入れないような低い戸があつて、小さな錠がついていた。いつのまにか、お堂の陰に隠れるかたちになつて、私はその扉を夢中で揺すぶっていた。それから手

を止めて、諦められぬ気持でお堂の裏側のほうを振り向き、まったく同じような潜り戸が板壁の下隅近くにあるのを目に止め、思うよりも先にそろそろと近寄った。

手をかけてそっと引くと、戸はあっさり外へひらいた。私はリュックサックを地面におろし、まず身ひとつ中へもぐりこんだ。正面の格子から雨天の柔かな光が滲んで、さほどの暗さでもなかった。入ったところは履物を脱ぐだけの狭い土間になっていて、腰の高さに床があった。あまり敵めしい御本尊でも困るので、床に手をつけて奥をのぞくと、目鼻立ちの風化しかけた石の地藏さんが六体、三尺あまりの背丈で、壁の前に無造作に、顔をおおよそ正面に向けて、まぢまぢに並べ置かれていた。床には不思議に埃が積っていない。総じて外から見たほど陰気ではなく、それに、意外に暖かった。私はリュックサックを引きずりこんで戸を閉め、前にまわるのはさすがに罰当たりと思って、奥の壁ぎわに七つ目の地藏さんみたいに腰をおろし、膝を小さく抱えた。

その前に、私は借りる場所が場所だからいちおう型どおりのことはしておこうと手を合わせかけて、止めた。馴れぬしぐさというよりも、なぜだか、妙に身についた、しかも芝居がかったしぐさに思えたのだ。

朝から雨の中を平気で歩いてきたくせに、なぜあんなに夢中になって屋根の下へ入りた

がったのか、もうわからなかった。濡れた身体は内から火照って寒さを覚えなかったが、動きを止めると左の足首がかえって疼いてきた。

眠りこむ直前に、地藏堂と掘立小屋と、斜向かいにひっそり閉じている二つの潜り戸が、つかのま鮮かに浮んだ。誰か、毎朝毎晩その道を通いなれた者がいたような、そんな気がした。

目を覚ますと、お堂の内外が同じ暗さになっていた。頭痛と寒気がして、熱が出はじめていた。異様に太く感じられる左足を引きずって格子戸に近寄り、顔をつけてのぞくと、まだ暮れきってはいない畑に雨が静かに降りつづき、一面に暗い空の、土手の向こうの地平のあたりが赤っぽい光をふくんでいた。N市のある方角だった。しかしそれ以上立っているのもつらくて、私はリュックサックから寝袋を出して地藏の前にひろげ、懷中電燈と水筒とウイスキーの瓶と、今朝がた山小屋で男に貰った非常食の袋を枕もとに放り出し、熱さましを口にふくんで水で呑み下すと寝袋の中へもぐりこんだ。格子からいくらか風が吹きこんできたが、この程度の小屋ならいまままでに何度も泊ったことがある。袋の中が温まるとすぐに眠りが降りてきた。

夜中に、地藏の顔が薄明りに照らされて、揃ってこちらを見おろしていた。昼間よりも

目鼻立ちがだいぶ蘇っているな、と思っているうちに、闇の中に消えた。私はむっくり起き上がり、もう勝手知った気持で懷中電燈もつけずに土間に降り、潜り戸から雨の中へ出て、掘立小屋の裏の夏草に向かって小便をした。それからまた寝袋にもどって仰向けになると、にわかに空腹を覚え、枕もとに手を伸ばして食い物の袋を胸の上に取った。袋の中にはチーズがあり、クラッカーがあり、チョコレートがあり、あの男の好物か、辛子をきかせた甘酸っぱい漬物が一口ずつ銀紙にくるんだのもあり、なにやら強壮剤めいた大蒜臭い粉の包みまであった。仰向けのまま私は暗がりの中で手当り次第に袋から口へ放りこんでは、枕もとの水筒とウイスキーをかわるがわる取って口につけ、そして腹が満ちるまで喰って、眠ってしまった。

しばらくして、私は目をひらいた。下腹が固くなっていた。地蔵の顔が六つまた浮んで、はつきりこちらを見おろし、足もとのほうへ流れるように消えた。同じことが何度かくりかえされた。薄明りはたしかに格子から差してくる。最初は気配ほどの明るさが、急に六つの顔を浮き立たせ、それからずっと薄らいで斜めに滑り落ちる。

遠くを走る車のライトではないか、と私は思った。N市から来る道路がどこか二、三箇所でこちらをまっすぐ向いて、すぐにまた折れる。こんな時刻にしかし仕事の帰りでもあ

るまい。女と寝たあとで、ひとりで夜道のハンドルを握っている……。

地蔵はたしかにこちらを見ていた。昼間はおおよそ正面を向いて無造作に並べられただけのように見えたが、じつは微妙な配慮があるようだ。それも、六体の視線が格子の外で拝む人間ではなく、ここであらうして寝ている人間の、胸から下腹に集まるようになっていた。誰か、わざわざこんな工夫をした男がいる。誰か、ときおりここでひとりで寝た男がいる。妙に身近に感じられた。

それにしても、こんなところで、なぜ恐がらないのだろう、と私はまだ下腹を固くしたまま自問した。ゆうべは仲間がいたが、おとといの晩も、その前の晩、そのまた前の晩も、山中のたった一人の小屋の中で、すこしも恐がらなかった。暗闇の中で野鼠どもが寝袋のすぐまわりをすごそと這いまわっているのを、同じように身近に感じていた。

以前はそうではなかった。以前はたとえば冬の空に樺の大木が鋭く顫える枯枝を無数に分けているのを見るだけで、一人の女への情欲が足もとから地をひろがって、幹を昇って、細い枝先のひとすじひとすじにまで突き上げていくような、そんな衝動を覚えたものだが、今ではこんな場所がふさわしい。

固くなった男根を握ってみても、以前とは違う表情がある。昼間この地蔵堂の前を通り

過ぎて、ふっと掘立小屋のほうを振り向いたあの目つきと、よく似た表情だ。

たしかに芝居がかったところはある。しかし芝居がかりと言うには、ときおりあまりにもまなまなしい、鈍重な促しだ。我身のこととしては思いも寄らぬほど陰気な存在に、しきりに成ろうとしている。

目をつぶるとあたり一面が、命ある物もない物もおしなべて、あまねく苦悶している感じがある。同じ苦悶の予感がこちらの身体の中にもあつて、それで周囲と釣合いが取れ、それで恐くない。ゆうべも、おとといの晩も、その前の、そのまた前の晩も、そうだった……。

目を覚ました時には、太陽はもう長い庇の上へまわり、揃って穂を起した稲の上に光が重く注いでいた。蟬がうつけたような声で鳴きしきり、時計を見るともう正午に近かった。まず覚えたのは空腹だった。寝袋をくるくるとまるめ、紙袋と水筒をつまむと、私は潜り戸を抜け、日の光を求めてお堂の前へまわり、水筒を花立ての脇に置き、紙袋をかかえて食事にかかった。足首にまだかすかな痛みが残っていた。その具合を試すように私は喰いながらお堂の前を歩きつ戻りつ、喉が渇くと水筒をあおり、目のくらみそうな正午の光の中を長いことうっとり歩いた。歩くうちに上衣を脱ぎ、登山シャツも脱いで、汗で黄ばん